

モデル事業名	わがらで地域づくりプログラム
活動団体名	色川百姓養成塾
ホームページ	http://www.zb.ztv.ne.jp/hyakusho/index.htm
所属/ 担当者名	事務局/ 瀧岡 寛子
連絡先	0735-56-0152、htakioka@hotmail.com
活動地域	和歌山県那智勝浦町色川地区

● 活動地域の概要

【色川地区】

- ・ 那智勝浦町の山間部 9 集落の総称
- ・ 標高 200～400m、面積 76.23 ㎢、林野率 98.7%
- ・ 平家の落人伝説があり、江戸時代までの千年間は、各集落がそれぞれ独立した村だった
- ・ 明治 22 年～昭和 30 年の 66 年間は「色川村」だった
- ・ 人口・世帯数、年齢別人口構成等：図および表参照
全体で 226 世帯・428 人。1977 年より移住者を受け入れ始め、現在では移住者が色川地区全体のおよそ 1/3 にのぼる
- ・ 高齢化率・平均年齢：全体では 45%・56 歳
移住者の少ない集落で高く、直柱に続き、小阪が高い
- ・ 公共交通：JR 紀伊勝浦駅から 1 日 3 便の町営バスで約 1 時間

【色川地区の集落別人口表（2010 年 4 月現在）】

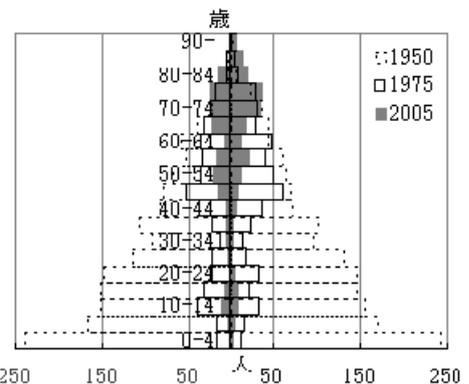
		人口		世帯数	平均年齢	高齢化率
			移住者 %			
東部	南平野	52	10 19	33	60	44
	小阪	47	1 2	28	74	83
中部	口色川	127	62 48	64	52	34
	大野	102	56 54	50	52	40
	熊瀬川	22	6 27	12	55	50
西部	田垣内	59	16 27	29	55	47
	坂足	7	4 57	3	52	28
	檜原	11	7 63	6	50	36
	直柱	1	0 0	1	74	100



【位置図】



【耕作放棄された棚田（小阪集落）】



【色川の年齢別人口構成の変遷】

- ・ 産業・雇用：主産業は林業・茶業だが、いずれも停滞。小規模事業者（商店、食品加工場など）もあるが、色川地区内における雇用機会は概して少なく、那智勝浦町内の中心部または隣の新宮市へ通勤するケースが多い。
- ・ 学校：保育所・小・中学校が各 1 校ずつ。現在、1 学年は概ね 1～5 名で、移住者の子どもがほとんど。高校は新宮市または串本町へ通学し、大学進学を機に色川を離れ、そのまま都会で就職するケースが多い。

● 活動地域の課題

- ・ 移住者が多く、地域づくりに向けた活動が活発に行われている一方で、地元住民の高齢化が進行している。表面上は活気づいているようでも、地元住民からの理解・協力が薄い、移住者中心の地域づくりとなりがちである。I・U ターン促進の上でも、地元住民が主体的に地域づくりを考え、移住者を受け入れる意欲がなければ難しい。
⇒ 地元住民の自信と誇りを掻き立て、地元住民が主役となった、地域の歴史・文化を大事にする地域づくりを進める必要がある。
- ・ 多様な地域づくり活動が同時並行で進んでいるが、それぞれ独立して動いており、相互の連携は十分とはいえない。
⇒ 各活動の連携を進め、一体的に地域の自治を目指す体制づくりの必要がある。
- ・ 本来、色川のような小さな地区だけが周辺地域から切り離して活性化できるはずはなく、より広域で地域づくりを考えねばならない。しかし、色川地区の移住者受け入れをはじめとする地域振興の取り組みの経験・蓄積が、那智勝浦町内および近隣市町村の他地区と共有できておらず、色川が「一人勝ちの先進地」と捉えられてしまう雰囲気がある。
⇒ 地域振興について、周辺の他地区と情報共有し、広域で協力して地域づくりを進めていく体制を模索する必要がある。

● 活動の内容

・平成20年度：若者とお年寄りの交流を通じて、「むら」を次につなぐ流れをつくるため、大学生など都会の若者が、むらで昔から営まれ受け継がれてきた暮らしについて、小阪集落のお年寄りに聞き取り調査を行い、それを「むらの教科書」としてまとめた。

・平成21年度：若者とお年寄りの交流・聞き取り調査を継続するとともに、集落支援員を核に、若者と地域住民の連携を強化し、地域づくりの人材育成と、住民の自治意識の向上を目指した。また、普遍的・持続的な活動の仕組みをつくるため、近隣他地区と連携して活動の波及に取り組んだ。

・平成22年度：より普遍的・持続的な活動体制にするため、代表・事務局を変更したが、これまでの取り組みを継続し、長期・短期滞在の若者を塾生として受け入れ、百姓の暮らしを学んだり、伝統行事に参加したり、聞き取り調査をするなどして、地元住民と交流し、それを通じて、むらを元気にし、次につなぐ流れをつくることを目指す。今年度も、常時、若者を受け入れ、地元住民を元気にする以下の3つのプロジェクトを行っている。

①「子どもとお年寄りの交流プロジェクト」：色川近隣の町に暮らす小中高生が、地元住民と交流しながらむらの暮らしを体験することを通して、子どもが地元のむらの暮らしや自然、過疎問題などにふれるとともに、子どもと住民の双方が地域の新たな魅力に気づき、誇りを感じられるようになることを目指す。

②「昔の暮らしの聞き取り調査プロジェクト」：昔の暮らしや伝統行事、小字、生活道などについて聞き取りし、記録・保存する。小字・生活道は、案内板を作って、色川内外の人が楽しめる散歩コースも検討する。

③「休耕田の花畑づくりプロジェクト」：休耕している棚田に花畑をつくる活動を、小阪区住民組織「美里会」と、田舎と都市の交流を図る「NPO法人JUON NETWORK」と協働で行い、休耕田の利活用、地元住民と若者の交流、地域の名所となるような花畑作りを目的とする。

また、21年度に連携を始めた近隣の古座川町西川地区と熊野川町小口地区と、地域の活性化についての話し合いを重ね、移住・交流に取り組むための仕組みづくりに協力している。

● 活動の成果

これまでの活動を通じて、若者の自主性・積極性の高揚がみられたほか、若者との交流から刺激を受け、小阪集落内においても住民組織の再結成など活気高揚がみられた。21年度は長期滞在の若者を核として、短期滞在の若者を受け入れ、多くの若者に、むらの持つ価値を垣間見てもらえたと同時に、コーディネータ役を果たす長期塾生の著しい成長がみられた。また、集落支援員を核とした住民自治の組織づくりへの取り組み、他地区との連携に向けた行政職員および集落住民との関係づくりも進展がみられた。

直近1年間の成果など

今年度は、長期滞在の塾生が小阪集落に住み、農業をしながら、住民から百姓の技を学んだり伝統行事に参加したりして、住民との交流を深めている。また、長期塾生を核に、短期滞在（数日～2週間）の若者を受け入れ、農作業や伝統行事などを体験しているほか、3つのプロジェクトも進行している。活動を通じて、若者と住民の双方が、むらの価値に気づき、継承に向けた行動の契機となることが見込まれる。日々交流している地元住民は、若者たちから大いに刺激を受け、むらの暮らしについて教えることや若者の受け入れ・民泊などに、より積極的になっていたり、これからのむらのあり方・存続、移住者の受け入れについて考えたり話し合ったりする機会が生まれている。塾生の中からも、色川への移住に関心を持つ者も現れている。

古座川町西川地区と熊野川町小口地区では、色川の取り組みを参考にしつつ、集落支援員など、地域活性化をサポートする人材の導入を検討し始めている。



むらぞうり作りを習う若者

● 今後の課題及び展望

・課題（活動を通して発見された課題等を記入）

これまでの取り組みを通じて、集落の再生には住民の自治意識高揚こそがカギであること、そのためには、住民自身が集落の暮らしの価値を再評価し、誇りを持ち直すことが欠かせないこと、集落外の若者が、今までの流れに目を向け敬意を払いつつ集落に出入りすることは、そのきっかけとなり得ることが確認できた。しかし、遠隔地まで足を運ぶ若者を呼ぶことが難しく、広報をいかに強化していくか、また、長期滞在の若者を核として短期滞在の若者を受け入れる態勢は現実的かつ効果的であり、このような取り組みの普及には、長期滞在の若者をいかに確保・育成・配置していくかが課題となる。さらに、現実として集落をこれからどうしていくかを考えると同時に、他地域へ波及させていくには、一過性の事業で終わらせず、いかに長く継続させるかが課題である。

・展望（今後の取組みや検討について記入）

- ・地元住民の誇りを取り戻し、地区全体で自治意識を高揚するため、より効果的な方法を引き続き検討する。
- ・色川内外に活動を周知し、活動の理解者、関心を持つ若者を増やしていくことに、引き続き取り組む。
- ・色川地区内の取り組みの成果を近隣他地区と共有する体制づくりに、引き続き取り組む。